

者からの生漆の買取価格の引上げを図ったことから、国産漆の生産量は平成27(2015)年以降増加に転じた。しかし、国産漆の生産量は、国宝・重要文化財建造物の理想的な修理周期での保存修理における漆の年平均使用量である約2.2トン⁹⁰に満たない上、工芸品等向けの国産漆の需要もあることから、国産漆の生産量を増やしていくことが重要となっている。このような中、漆の産地ではウルシ林の造成・整備等が進められている(事例Ⅱ-7)。

事例Ⅱ-7 地域の人々と共に取り組む漆文化を守る活動

特定非営利活動法人丹波漆(京都府福知山市)は、国内で数少ない漆の産地である福知山市の夜久野地域において、ウルシの植栽・管理や漆掻き技術の継承に取り組みながら、地域の人々と共に漆文化を守る活動を行っている。

毎年100本のウルシの木を植樹することを目標に、植樹祭等を通じてウルシの木を植える取組を進めており、同法人が平成24(2012)年に設立した当時約400本だったウルシの木は約1,800本となっている。それに伴い、漆掻き職人は1人から5人に増え、技術の継承も図っている。また、多くの人に漆について知ってもらい、協力を得ることがこれらの取組の継続につながるの思いから、「丹波漆」の魅力や生産状況などに関する講演会を実施するほか、福知山市営「やくの木と漆の館」と協働で漆を使用した工芸品の展示や「漆掻き現場見学&漆塗り体験」ツアーの開催を行っている。さらに、丹波漆を次世代に受け継ぐため、学生と共に漆の魅力を広める活動にも力を入れている。

同法人は、令和6(2024)年に全国で日本文化財漆協会(東京都台東区)、日本うるし掻き技術保存会(岩手県二戸市)に次いで3番目、西日本では初めての団体として、文化庁から選定保存技術^注「日本産漆生産・精製」の保存団体に認定された。令和7(2025)年6月には、2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)に丹波漆を出展し、地域住民もスタッフとして加わりながら、会場での展示や、植栽地からの漆掻きの生中継等を通じて丹波漆の魅力をPRするなど、認定後も様々な活動を行っており、今後も同法人の活動が地域の人々の参画も得ながら発展していくことが期待される。

注：文化財の保存のために欠くことのできない伝統的な技術又は技能である「文化財保存技術」のうち、保存の措置を講ずる必要のあるものを「選定保存技術」として選定している。



漆掻き



植樹祭の様子

(写真提供：特定非営利活動法人丹波漆)

⁹⁰ 文化庁プレスリリース「文化財保存修理用資材の長期需要予測調査の結果について」(平成29(2017)年4月28日付け)